

野中章弘
1953年 兵庫県生まれ。
アジアをフィールドに活字、
写真、ビデオによるリポート
を続ける。著書に「沈黙
と微笑」「絆と絆」など。早
稲田大学、東京大学講師。
アジアプレス代表。



不朽の毛沢東グッズ

長江
を
行
く

数々の名品、珍品が並ぶ骨董市で必ずお目にかかる毛グッズ。中でも万単位の種類と億を超える数を誇る毛バッジは、熱狂的な収集家がいるほど奥の深いアンティークなのだ。

値の張るものは見るだけ。私のお目当ては毛沢東グッズなのである。これはあまりカネもかからず、収集の満足度も高い。こじつければ歴史の勉強にもなる。まず毛グッズで一番ポピュラーなものは、みなさんよくご存知の毛バッジ。これは予想外に奥が深い。たかがバッジとなめてはいけない。



「毛語録」を手にする紅衛兵と毛主席 (12元)

文革初期に生産されたものだけでも5万種類、数十億個というから、膨大な数である。ポピュラーなものは赤地に金や銀で毛主席の顔を模ったもので、ほとんどがアルミ製。これは初心者向けといつてよい。私の狙い目は文革以前に製造されたものである。この類は数が少ない。数万枚の所蔵を誇る収集家でも、この時期のものはほんの数枚ということもあるらしい。古いものだと1940年代初期にさかのぼる。

文革初期に生産されたものだけでは鉛で素朴ながらも味わいがある。この二人に林彪がプラスされるとマニア垂涎の品となる。これは私も実物を見たことがない。50年代に入るとスターリンや金日成も登場する。バッジは種類も多いので見ていて飽きることがなく、値段も数元から20元(1元≒約13円)程度と手ごろである。南京ではちよつと古そうなものを10個ほど買った。まとめて100元ほど。これは所蔵用というよりお土産に使う。成績優秀な学生などに褒美としてあげる。ただし、怪訝な顔はされても、あんまり喜ばれたという記憶はない。毛グッズで最近の掘り出し物は、

文革時代に毛バッジがあまりに膨大な量となり、毛主席自身が「もう十分」と生産をやめさせたという



南京の街から望む長江

フリーのジャーナリストというのはいが貧乏である。元来カネとはあまり縁がなく、旅の途上で珍品、名品の類に遭遇しても、それを買求めるだけの余裕がない。モンゴルで見られた恐竜の卵やラオスの奥地の手織りの布地、ニューギニア島の木彫り細工など、やはり珍しいもの、手の凝ったものはそれなりの値段がついており、なかなか手がでない。それでも旅先で骨董屋を冷やかすのは私のひそかな楽しみとなっている。中国では十数年前から各地で骨董市が立つようになり、南京でも最初に骨董屋の並ぶ界限に足を運んだものである。

上海の露店で見つけた「毛沢東語録」の日本語版の初版本。赤い表紙は擦り切れており、三十数年の歳月がじつとりと染み込んだ逸品である。これは15元。

北京では紅衛兵が巻いていた赤い腕章を5元で手に入れた。布の縁は手垢で汚れ、テカテカと黒く鈍い光を放っている。それはそれで暗い情念が吹き荒れた文革時代の色といえなくもない。

土地柄、南京の骨董屋には遺跡から掘り出したものもたくさん持ち込まれる。盗掘したものもあれば、贗物も数知れず。また値打ちの低いものは博物館でも引き取ってくれないので、古物商へ流れてくる。

そういえば、数年前、私の知人がこの辺りの骨董品を日本へごっそり持ち出そうとして捕まったことがあった。古い文化財などが含まれていたらしい。一攫千金を企んでいたのかもしれない。

まあ、バッジや腕章の収集ぐらいなら罪はない。毛語録、毛バッジ、紅衛兵の腕章の毛沢東3点セットは私の机のそばに飾っている。個人崇拜の残り香がほんのりと部屋に漂うのである。